



クロモジ エゴノキ (実) コウヤボウキ (種)



ゲンノショウコ

葉がつくよりも先にたくさんの黄色い花を垂れ下げて咲かせます。果実はタンニンを含んでいて、お歯黒として使われました。お歯黒とは、歯を黒く染める風習で、結婚した女性が行っていました。お歯黒に用いるタンニン的一种は、市販品もありましたが、農山村では家の近くで採れる植物も用いられていました。

春に花が咲くクロモジは、若い枝が緑色で、古い枝ほど黒い斑点が入ります。枝葉からはよい香りがします。この枝から楊枝が作られます。今でも菓子を買うと、クロモジの楊枝をつけてくれる和菓子屋もあります。

エゴノキは、5～6月頃に白色の花を下向きに咲かせ、7月頃になるとくすんだ白色の果実をつけます。この果実は、昔、石けんの代わりに使われていました。果実には、サポニンという物質が含まれていて、水に入れて攪拌すると泡が出ます。小さなペットボトルに水と果実を入れてしばらく振ってみるとわかりやすいでしょう。ただし、毒性があるため、試した後は周囲にそのまま流さず、きちんと持ち帰りましょう。

コウヤボウキは、早いものでは8月下旬から咲き始め、12月頃まで白色の花を咲かせます。その後、白くてふわふわした綿毛をつけ、なんとも可愛い様子です。この



タケニグサ

枝が高野山でホウキとして使われていたことから、コウヤボウキと呼ばれました。天覧山・多峯主山の至る所で見ることができます。

植物の中には、民間薬として用いられたものもありました。例えばゲンノショウコです。主に下痢止め薬として用いられ、服用するとたちまち効き目が現れることから「現の証拠」という名がついたと言われていました。しかし、ゲンノショウコと間違えて、似ているウマノアシガタやトリカブトなどの毒を含む植物を誤食する方がいたそうなので、試さないようにしましょう。タケニグサなど植物に含まれる毒性を利用し、害虫駆除に用いられる植物もありました。

他にも春の七草であるハコベの仲間、神事で用いられるヒサカキなど、多くの有用植物に出会うことができます。そして、どの植物も季節とともに訪れる方々を色や形、香りなどで楽しませてくれます。現在では、有用植物としてなかなか用いられなくなった植物もありますが、植物は今でも変わらず私たちの身近にあって、生活に寄り添っています。ぜひ、散策をして、植物との出会いを楽しんでください。

「植物を利用する」視点で飯能を知ろう！



●第15号の特集は「植物利用」です。

身近に生えている植物を私たちは様々な方法で利用し、生活しています。例えば、食料・道具・材料・燃料など身の回りには植物そのものだけでなく、植物を利用したものがたくさんあります。

今回は、縄文時代の植物利用と現在の身近に見ら

れる植物利用に焦点をあてて特集しました。どのように人々が植物を利用してきたのか、そこから見える人々の知恵を是非感じて、自然と共生する大切さを考えてみてください。

縄文時代の植物利用

飯能市教育委員会生涯学習スポーツ部生涯学習課 専門調査員 大野朝日

はじめに

現代に生きる私たちと同様に、縄文時代の人々も植物を様々な利用して生活していました。

しかし、縄文時代の遺跡から、当時の人々が食べた木の実や、家を建てた木の柱などが発見されることは、とても稀です。木材や骨など、生き物の体がもとなった物質は、長い年月の間に酸性の土壌に腐食されたり、細菌や小さな生き物たちの働きによって土へ還ってしまったりして、現在まで形を残すことが難しいからです。

ただ、植物そのものが見つからなくとも、飯能に住んでいた縄文時代の人々が、どのように植物を利用していたのかを推測できる資料はあります。

飯能市の遺跡で見つかった様々な考古資料から、縄文時代の植物利用の一端をご紹介します。

縄文の編み物

昨年末、飯能市では初めての事例となる貴重な資料が加能里遺跡第90次調査地点（岩沢）で見つかりました（図1）。よく見ると、節のある植物を縦に割ったようなものが、直行する向きで組まれている様子がわかります。



縄文時代晩期の人々が、ササ類を材料にして作った編み物の一部が、焼けて炭になったものであると思われます。編み物全体の様子はわかりませんが、住居の縁の床近くから見つかったのが、家の床に敷いていた「ござ」だと考えられます。焼け崩れた家の下敷きになるなどして、そのままの形が炭となって残ったものなのでしょう。

このような縄文時代の編み物については、低湿地に位置する遺跡を中心に、植物の割り材などを材料として多

くの技法が使分けられた資料が全国で見つかり、当時の人々にとって身近な道具だったことがわかってきました。

その様子は、縄文土器の底についた痕からもわかることがあります。図2・図3は、加能里遺跡の第43次調査地点(岩沢)で見つかった縄文時代晩期のものと思われる土器の底の部分です。図2の土器底に編み物の痕がついているのがわかります。粘土をこねて土器を作る際、取り回しがし易いように、編み物を下敷きとして使っていたのでしょう。また、土器の下敷きには、編み物だけでなく、大きな葉っぱも使われていました(図3)。

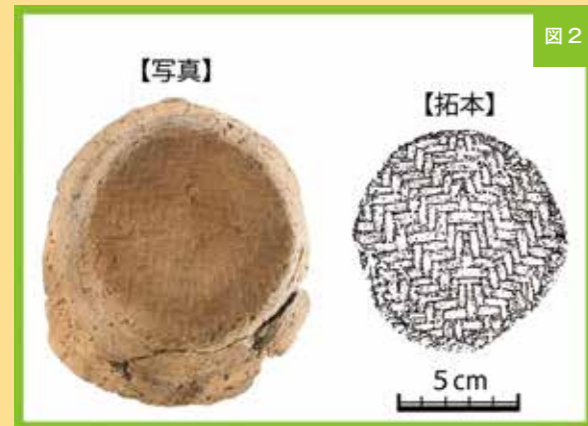


図2



図3

管理・栽培された?植物

同じく加能里遺跡第43次調査地点では、「敷物圧痕」のある土器以外にも、ウルシの樹液がこびりついた土器も出土しています。漆は、土器の使用時には見えない、台部の内側についていました(図4)。この土器を装飾するために漆が塗られているわけではなく、この土器が壊れてしまった後に、漆を保管しておくための容器として、または漆を塗りつける際のパレットとして、再利用されたものでしょう。

ウルシは、現代でも利用されている馴染みのある植物ですが、日本列島には本来、野生のウルシは生えていません。縄文時代に日本列島へと持ち込まれてきた植物だ

と考えられています。

近年では、縄文時代の植物利用の研究がすすみ、縄文時代の人々が、植物を育てたり、手をかけて管理していたということも明らかになりつつあります。ウルシのように野生では日本列島に存在していない植物や、栽培に適した種類の植物が遺跡から見つかることは、縄文時代の植物利用を考えるうえでとても貴重な資料です。

別の例として、土器に偶然できた割れ口から炭化したマメ類植物の種子が顔をみせている資料が、別所平遺跡第2次調査地点(大河原)で見つかりました(図5)。この土器に似た事例は、北本市のデーノタメ遺跡でも見つかりました。デーノタメ遺跡の事例では、土器に残ったマメの粒の痕「種子圧痕」の大きさが野生のマメに比べて大型であることから、人が育て「栽培化」したマメであった可能性が考えられています。土器の胎土に意図的に練り込まれたものか、偶然に混ざり込んでしまったのかは定かではありませんが、別所平遺跡で見つかったマメも、この土器を作った人の身の回りで栽培されていたものかもしれません。



図5

おわりに

縄文時代の植物利用というテーマは、直接的な資料こそ多くありませんが、縄文時代の衣食住に密接に関係する重要なものです。当時の人々にとっても、飯能の木々や緑は「お宝」だったことでしょう。私たちが日々の生活で触れたり、目にしたりする植物と同じものを、数千年前の飯能人も見ていたかもしれません。



図4

飯能市は植物の宝庫(Ⅶ)

—飯能の植生と身近で見られる有用植物—

飯能市立博物館 学芸員
長谷川裕子

『はんのうお宝スポット』では、これまで6回に渡って、飯能市の宝である植物について紹介してきました。飯能市の自然林、二次林、特徴的な植物を紹介し、その後、市内に自生している植物を3回連載として紹介しました。今回は、飯能市の植生と天覧山・多峯主山で見られる一般的な有用植物を紹介します。

1. 飯能市の植生

地表をおおう植物の広がりを植生、といいます。植生を決める重要な要因は、気温と降水量そして土壌です。日本は降水量が多いので、最終的には森林植生になります。年平均気温の差から、日本列島の森林帯を亜熱帯、暖温帯、冷温帯、亜寒帯に分けることができます。飯能市はそのほとんどが暖温帯に属していますが、冷温帯植生も見られます。植物の移り変わりのことを遷移といい、その最終段階の森林のことを極相林といいます。暖温帯の極相林では、スダジイやタブノキ、アラカシ、シラカシといったカシの仲間などの照葉樹が優占します。例えば、吾野地区では、大山祇神社の社寺林としてウラジロガシ林が見られます。暖温帯の照葉樹林が、飯能市のような内陸部にあるのは珍しく、貴重であることから埼玉県天然記念物になっています。冷温帯樹林としては、入間川水源がある名栗地区ウノタワのブナ林や、溪流沿いにあるサワグルミ林が見られます。また吾野地区の刈場峠付近ではミズナラ林があります。

土壌や岩石によって特徴的な植生が見られることもあります。名栗地区の白岩や蟬指には石灰岩地があり、そのような場所を好む植物が見られます。キンモウワラビ、ミヤマウラジロやヤハズハハコなどが岩壁に生育しています。人が手を加えたことで、遷移が途中で止まり、二次林であるコナラやクヌギなどの落葉樹林が維持されている場所もあります。加治地区にはコナラやクヌギの雑木林が残り、カタクリ・イカリソウの群落が見られます。この群落は、飯能市の天然記念物になっています。

そして地形の特徴として、飯能市は関東山地と関東平野にまたがって位置しています。また、入間川や高麗川などが流れ、飯能台地が広がるなど様々な環境があることが、飯能市の植生に影響しています。埼玉県では、種子植物とシダ植物を合わせて約2,900種の植物が確認されており、そのうち飯能市では約1,600種が確認されています。飯能市は埼玉県の5%程度の面積しか占めていないのにもかかわらず、県内で見られる約55%の植物が生

息しているのです。このことから飯能市は、埼玉県において「植物の宝庫」といえるのではないのでしょうか。

2 天覧山・多峯主山で見られる有用植物

飯能市の観光シンボルともいわれる天覧山・多峯主山は、昔から人々が雑木林や畑、田んぼとして利用してきました。このような二次的自然は「里山」と呼ばれます。里山では、林の中やその縁、沢と湿地、草原に水田など、自然遷移と人の働きかけによって様々な環境が生まれ、多くの植物が見られます。

雑木林では、コナラやクヌギなどを薪炭として利用していました。このような落葉樹は、冬になると枯れ葉を落とすので、農閑期には「落ち葉掃き(くずはき)」を行いました。集めた落ち葉は、竹やわらで囲った場所に貯め置き、ミミズや微生物などの働きによって分解され、やがて堆肥になりました。このような雑木林がある里山では、有用植物として使われていた植物が多くありますので、いくつか紹介しましょう。

春一番に咲く樹木の一つに、キブシがあります。早春、



落ち葉掃き(くずはき)の様子



キブシ